

病虫害発生予報 第4号(7月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2300

< 予報の概要 >

| 作物名 | 病虫害名 | 発生量 | 作物名 | 病虫害名 | 発生量 |
|--------------------------|---|----------------------------|------|--|--------------------------|
| 水稲 | いもち病 紋枯病 縞葉枯病 | 並 並 紀北:やや多 紀南:並 | 野菜全般 | ミカンキロアサミウマ シロイチモシヨトウ | やや少 並 |
| | ニカメイガ ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ | 並 並 並 並 並 並 | カンキツ | 黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアサミウマ ゴマダラカミキリ | 並多 やや少 並 並 並 |
| ウリ類 | 疫病 べと病 うどんこ病 つる枯病 | 並 並 並 並 | カキ | 炭そ病 うどんこ病 円星落葉病、角斑落葉病 フジコナカイガラムシ | 並 並 やや多、並 やや少 |
| トマト、ナス、 ピーマン、シ シトウ | 疫病 モザイク病 | 並 並 | モモ | せん孔細菌病 | 並 |
| 野菜全般 | アブラムシ類 ハダニ類 ミナミキイロアサミウマ | 並 並 並 | 果樹全般 | カメムシ類 | 紀北:やや少 紀南:並 |

気象予報

1か月予報(予報期間 6月25日～7月24日 大阪管区气象台)

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は高い確率50%、降水量は平年並または多い確率ともに40%、日照時間は平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目、2週目が高い確率60%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%) >



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

| | 月平均気温 (平年値) (°C) | 月降水量 (平年値) (mm) |
|----|---------------------|--------------------|
| 7月 | 和歌山 27.0 | 和歌山 145 |
| | 潮岬 25.5 | 潮岬 291 |

I. 水 稲

1. いもち病(葉いもち)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月3半旬の紀南地域(田辺市以南)における発病株率は0%(平年0.2%)と平年並であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 補植用苗は葉いもちの発生源となるので、早急に処分する。

② 常発地及びコシヒカリ、キヌヒカリ等の罹病性品種では発病しやすいので初発時期に注意し、発生が見られたら直ちに薬剤防除する。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月3半旬の紀南地域(田辺市以南)における発病株率は0%(平年0%)と平年並であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 梅雨明け後の高温期から病勢が急激に進展するので、常発地や前年の多発ほ場では幼穂形成期～穂ばらみ期の防除を徹底する。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 紀北地域：やや多、紀南地域：並

(2) 予報の根拠

① 本年のヒメトビウンカ(越冬世代)のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市で14.7%(前年15.3%)、かつらぎ町で12.7%(前年19.1%)であった。地域の保毒虫率が10%を越えると発病株が多くなるとされている。

② 6月3半旬の紀南地域(田辺市以南)における発病株率は0%(平年0%)と平年並であった。

③ ヒメトビウンカの7月の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ヒメトビウンカの防除を行う。

4. ニカメイガ(紀北地域)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月3半旬現在、紀の川市のフェロモントラップでは誘殺されていない(平年0.7頭)。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 7月上旬の被害茎率が6.2%以下なら防除の必要はない。

5. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月3半旬の紀南地域での発生は、25株あたり0.3頭(平年0.3頭)と平年並であった。

② 予察灯による6月の誘殺数は4半旬現在、上富田町0頭(平年0.6頭)、那智勝浦町0頭(平年0.6頭)、紀の川市5頭(平年2.2頭)と平年並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① アドマイヤー箱粒剤等を育苗箱施用した6月田植えのは場では、7月の防除は特に必要としない。

6. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月3半旬の紀南地域での発生は、25株あたり0頭(平年3.0頭)と平年に比べやや少なかった。
- ② 予察灯による6月の誘殺数は4半旬現在、上富田町5頭(平年0.5頭)、那智勝浦町27頭(平年11.9頭)、紀の川市3頭(平年11.8頭)と平年並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカに準ずる。

7. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 やや遅 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月3半旬の紀南地域での発生は、25株あたり0.2頭(平年12.6頭)と平年に比べやや少なかった。
- ② 予察灯への初飛来は、紀の川市では6月4半旬(平年6月2半旬)と平年並だった。上富田町、那智勝浦町では6月4半旬現在、飛来を認めていない。(平年初飛来時期：上富田町5月6半旬、那智勝浦町5月6半旬)
- ③ 予察灯による6月の誘殺数は4半旬現在、上富田町0頭(平年165.5頭)、那智勝浦町0頭(平年96.0頭)、紀の川市3頭(平年44.0頭)である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカに準ずる。

8. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月3半旬の紀南地域では、発生を認めていない(平年0頭)。
- ② 予察灯による4月から6月4半旬までの誘殺数は、上富田町0頭(平年0.2頭)、那智勝浦町0頭(平年0.2頭)、紀の川市0頭(平年0.3頭)と平年並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカに準ずる。

9. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月3半旬の紀南地域では、発生を認めていない(平年25株あたり被害葉数0葉)。
- ② 6月3半旬現在、紀の川市の蛍光灯誘殺箱への誘殺数は0頭(平年0頭)である。フェロモントラップへの誘殺数も0頭(前年0頭)である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼穂形成期前後の被害は収量に影響するので、今後の予察情報に注意する。

Ⅱ．野 菜

<ウリ類>

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀の川市の露地栽培スイカにおける発生ほ場率は6月3半旬現在、0%（平年0%）であった。
- ② 日高地域の露地栽培スイカにおける発生ほ場率は6月5半旬現在、0%（前年0%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場の排水を良くし冠水や滞水を防ぐ。

2. べと病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀の川市のキュウリにおける発生ほ場率は6月3半旬現在、施設栽培で0%（平年50%）で平年に比べ少なく、露地栽培で50%（平年67%）と平年並であった。
- ② 日高地域の施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は6月5半旬現在、70%（前年58%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培では換気を良くし、湿度低下を図る。
- ② 露地栽培では排水を良くし、薬剤を予防散布する。

3. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀の川市のキュウリにおける発生ほ場率は6月3半旬現在、施設栽培で10%（平年38%）、露地栽培で17%（平年50%）とやや低かった。
- ② 日高地域の施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は6月5半旬現在、70%（前年58%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、他系統の薬剤とのローテーション散布を行う。

4. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀の川市の露地栽培スイカにおける発生ほ場率は6月3半旬現在、0%（平年0%）と平年並であった。
- ② 日高地域の露地栽培スイカにおける発生ほ場率は6月5半旬現在、0%（過去6年間の平均0%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 降雨にともない株元から茎葉に病勢が進展するので、梅雨期の防除に重点を置く。

<トマト、ナス、ピーマン、シシトウ>

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀の川市の露地栽培ナスおよび露地栽培シシトウにおける発生ほ場率は6月3半旬現在、ともに0%（過去9年間の平均：ナス0%、シシトウ0%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 梅雨末期の多雨で急激に病勢が進展するため、降雨後は早急に防除する。

② ほ場の排水を良くし、多湿にならないようにする。

2. モザイク病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀の川市の露地栽培シシトウにおける発生ほ場率は6月3半旬現在、0%（過去9年間の平均4.6%）であった。

② 7月のアブラムシ類の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① アブラムシ類の防除を徹底する。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の露地栽培ナスでは6月3半旬現在、モモアカアブラムシの寄生葉率4%（平年7%）、ワタアブラムシ5%（平年5%）と平年並であった。

② 紀中地域の露地栽培スイカでは6月3半旬現在、ワタアブラムシの発生は1葉あたり0.1頭（平年0.6頭）と平年に比べやや少なかった。

③ 黄色水盤（紀の川市）への6月の飛来数は4半旬現在、47頭（平年161頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ワタアブラムシ、モモアカアブラムシは、ともに薬剤感受性の低下がみられるので、同一薬剤の連用は避ける。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の施設栽培ナスでは6月3半旬現在、カンザワハダニの発生ほ場率10%（平年25%）、寄生葉率1.0%（平年6.3%）と平年に比べやや少なかった。ナミハダニの発生は認めていない（平年発生ほ場率5.7%、平年寄生葉率0.6%）。

② 紀北地域の露地栽培ナスでは6月3半旬現在、カンザワハダニの発生ほ場率50%（平年45%）、寄生葉率16%（平年14%）と平年並であった。ナミハダニの発生ほ場率10%（平年発生ほ場率10%）、寄生葉率0.6%（平年寄生葉率3.7%）と平年並であった。

③ 紀中地域の露地栽培スイカでは6月3半旬現在、カンザワハダニは1葉あたり0.1頭（平年0.3頭）、ナミハダニは1葉あたり0.2頭（平年0.2頭）と共に平年並の発生であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性対策として、同一薬剤の連用を避ける。

3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の施設栽培ナスでは6月3半旬現在、発生ほ場率40%（平成36%）、寄生葉率14%（平成15%）と平成並であった。
② 紀北地域の露地栽培ナスでは6月3半旬現在、発生ほ場率13%（平成34%）、寄生葉率1%（平成11%）と平成に比べやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
② 施設栽培では、栽培終了後に7～10日間施設を密閉して死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の施設栽培ナスでは6月3半旬現在、ミカンキイロアザミウマの発生は認めていない（平成発生ほ場率21%、平成寄生葉率7.8%）。
② 紀北地域の露地栽培ナスでは6月3半旬現在、発生ほ場率13%（平成34%）、寄生葉率0.6%（平成11%）と平成に比べやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマの項に準ずる。

5. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀中地域の露地栽培スイカでは6月3半旬現在、被害果率が3.2%（平成4.1%）と平成並であった。
② フェロモントラップの6月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市4頭（平成11.4頭）、御坊市92頭（平成95.1頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 若齢幼虫を対象に初期防除に努める。
② 幼虫は作物の生長点付近の未展開葉の芯部に潜入するので、薬剤による防除効果が上がりにくい。初期は局部的に発生するので、管理作業時に見つけしだい捕殺する。
③ 施設栽培では、栽培終了後に20日程度施設を密閉して死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除）における初発は5月30日と平成よりやや早く、6月下旬の発病果率は48.3%（平成30.7%）、発病度は8.3（平成5.5）と、いずれも平成より多かったが、防除区は発病果率4.1%（平成4.0%）、発病度0.6（平成0.6）と、いずれも平成並であった。
② 6月中旬の巡回調査によると、発病果率は1.7%（平成6.8%）と平成より少なく、果実の発病園率は28%（平成30%）と平成並であった。

- ③ 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 枯枝や剪定枝の処理を徹底する。
 - ② マンゼブ・マンネブ剤の場合、前回の薬剤散布からの累積降水量が250mm程度となった時点で散布する。
 - ③ 6月中下旬に散布できなかった園では、ただちに散布する。

2. かいよう病

- (1) 予報内容 果実発生量 多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除）における6月中旬の春葉の発病葉率は41.0%（平年18.0%）と平年より多かった。
 - ② 6月中旬の巡回調査によると、春葉の発病園率は23%（平年15%）と平年より多かった。中晩柑の罹病性品種で広く発病がみられ、ウンシュウミカンでも発病がみられた。
 - ③ 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発病園では無機銅水和剤（炭酸カルシウム剤200倍加用）を散布する。強風雨に遭う前の予防散布が重要である。無機銅水和剤は高温時の葉害発生に注意する。
 - ② 春葉、夏梢の病斑は果実への伝染源になるので剪除する。
 - ③ 防風ネット設置などの防風対策に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除）における6月中旬の100葉あたり雌成虫数は4.4頭（平年6.4頭）と平年並であった。
 - ② 6月中旬の巡回調査によると、発生園率は14%（平年50%）、100葉あたり雌成虫数は32頭（平年68頭）、寄生葉率は6.2%（平年15.5%）と、いずれもやや少なかった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① ミカンハダニは高度の薬剤抵抗性系統が出現しやすいので、薬剤抵抗性対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。ただし、高温強日射時の散布は葉害が発生しやすく、7月中旬以降の散布は果実品質を低下させるおそれがあるので、散布は7月上旬までとする。

4. ヤノネカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生量 並
発生時期 第2世代1令幼虫初発日 7月6半旬
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除）における第1世代1令幼虫の初発は5月5半旬（平年5月4半旬）と平年に比べやや遅かった。
 - ② 昨年10月の巡回調査では、発生園率は5.9%（平年7.5%）、寄生果率は0.3%（平年0.5%）とほぼ平年並で、雌成虫の越冬量も平年並であると考えられる。
 - ③ 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 6月下旬に防除できなかった園では、7月上旬のうちに97%・98%マシン油乳剤の200倍やスプラサイド乳剤40の1,500～2,000倍で防除する。
 - ② 未成熟成虫がみられる場合はスプラサイド乳剤40を1,500倍で散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除）における6月中旬のトラップへの誘殺数は平年と比べやや少なく、果実寄生は確認していない。
- ② 巡回調査によると、各地域とも6月の発生量は少なかった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 地域での発生消長調査の結果により、適期防除に努める。

6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場、各地域とも成虫の初発の発生時期は平年よりやや遅く、6月中旬の発生量は平年より少なかった。
- ② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生園では成虫の捕殺に努めるとともに、有機リン系またはネオニコチノイド系の薬剤を散布する。さらに発生が多い園では7月中旬以降にモスピラン水溶剤200倍～400倍による株元散布を行う。

<カ キ>

1. 炭そ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月の巡回調査では新梢の病斑は認められなかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 適切な肥培管理と園内の通風・日照の改善、発病枝の剪除などの耕種的防除を行う。
- ② 薬剤は発育枝にも十分散布する。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月の巡回調査では、発病葉率は「富有」で0.9%（平年4.6%）、「平核無」・「刀根早生」で0.1%（平年0.7%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に散布する。
- ② 盛夏期には一時休止するが、好適な気象条件や園地条件によっては発病を繰り返すので、二次伝染の防止に努める。

3. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 円星落葉病 やや多、角斑落葉病 並

(2) 予報根拠

- ① 昨年10月の巡回調査では、「富有」における円星落葉病の発病葉率は7.0%（平年1.5%）と平年よりやや多く、角斑落葉病の発病葉率は20.8%（平年21.8%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹勢の低下が発病を助長するので、肥培管理に努める。
- ② 円星落葉病の子のう胞子飛散は、7月中旬までの降雨後に多くみられるので、この時期に薬剤を定期的に予防散布する。

4. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 6月の巡回調査では、寄生果率は「富有」で3.7%（平年9.2%）、「平核無」・「刀根早生」で0%（平年1.3%）と平年よりやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発育の早晩は平年並と予想されるので、次回の防除適期は8月上・中旬頃になると予想される。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の巡回調査では、発病葉率は2.0%（平年5.2%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防風ネット、防風垣などの耕種的防除に努める。

<果樹全般>

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 紀北地域：やや少、紀南地域：並

(2) 予報の根拠

① 紀北地域での本年の越冬量は、0頭（平年0.2頭（極端に越冬量が多かった年を除く））と、平年よりやや少なかった。紀南地域（有田含め）でも0頭（平年0.3頭）と、平年よりやや少なかった。

② ヒノキ花粉飛散数比（本年／前年）は7.2であり、カメムシの発生量に対して餌となる球果の量が多くなると考えられるため、果樹園への飛来は少ないと考えられる。

③ うめ研究所（みなべ町東本庄）の5月から6月中旬までの予察灯における越冬成虫および新成虫の誘殺数は、平年並であった。

(3) 防除上注意すべき諸点

① 最新のカメムシ類発生状況は、県農林水産総合技術センターホームページの果樹カメムシ情報を参照する。

② 発生が多い地域では果樹園への飛来と被害に注意し、被害がみられる場合は、薬剤散布を行う。

③ モモ園では、除袋後の収穫直前に吸汁される可能性があるため、飛来を確認したら早急に薬剤散布を行う。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ホームページ <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyohou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。